

富山国際大学地域学部紀要の発刊にあたり

On the Occasion of the Start of Journal of Faculty of Regional Science ,
Toyama University of International Studies

地域学部長 田 中 忠 治
TANAKA Chuji

近年、世界レベルで、国家レベルで、さらには学術の世界でも、「地域」への関心が日々深まってきている。

1989年ベルリンの壁が崩壊し、それが象徴していた冷戦構造が消滅して、米ソ二大国の抑圧の下で沈黙していた小国、小民族が自らの文化を主張し始めた。これまで普遍的価値とみられていた西洋的価値と小国、小民族の個別的価値との間での摩擦、葛藤が生じ、小国、小民族同士の衝突も生じている。また、日本国内でも55年体制が崩壊して、イデオロギー時代が終わり、種々の規制が大幅に緩和されて、日本国という普遍的価値と国内各地の個別的価値の間に摩擦が生じるようになっている。いままでも中央（あるいは大国）に対して地方（あるいは衛星的小国）として位置づけられ、中央への従属を強いられていた地域が、それぞれのレベルで地域の特異性、個別性を主張する時代になった。そして、現在、地域の主体性が注目され、地域のアイデンティティを形成してきた地域固有の文化の相対性が注目されるようになっている。

また、国際化、情報化の進展によって、国境を越えた経済的、社会的、文化的交流が拡大し、いわゆるグローバリゼーション（世界化）なるものが急激に進んでいる。この傾向も世界の同質化と個性抹消の過程を意味するものではなく、グローバリゼーションによって外部からの普遍的価値に対する地域の個別的価値からの抵抗がみられ、現実的には個別的価値（地域）を重視する方向で進んでいるのが現状である。

このような中央に対する地域の復権的、奪権的な動きから地域が注目されている一方、これまでの学術全般のあり方に対する反省からも、地域が注目されるようになっている。学術各分野はより綿密な体系的仮説を求めあまり、専門分化主義におちいり、狭い専門領域を設定して、それを固守する方向で進んできた。そのため社会事象そのものの認識が断片的、部分的となって、結果的に人間の生活を脅かすような事態を招いてしまっている。そのことへの反省である。一例を挙げれば道路開発である。それ自体は、経済的効率を高めるといふ経済学的知識にそったものであり、道路を造るといふ科学的知識の適用であって、正当であるといつてよいであろう。しかし、現実的には、それが環境破壊という事態を発生せしめる因となる場合が多いのである。これは学問の領域化からはみ出し、これまで学問の対象にならなかった社会の構成要素によって生み出された現象なのであるといわれている。

(注1) このような事態の発生を避けるためには、道路開発が実施される地域の構成諸要素とその相互関係を十分に認識した上で、開発を進める必要がある。日本学術会議会長の吉川弘之氏の言葉を借りれば、その地域の「俯瞰的」考察が必要とされるのである。(注2) つまり開発を行う前提として対象となる地域全体の包括的研究が求められるのである。

地域の研究というと、第二次大戦後にアメリカから導入され、特にアジアなどの低開発諸国の研究に適用されてきた地域研究 (Area Studies) が頭に浮かぶ。この地域研究が、今日の時代の要請に応えられないのだからと思う人が多いであろう。確かに地域への関心の高まりから、地域研究そのもののあり方が再検討されるようになり、時代の要請の応えようとする動きが出てきている。(注3) これまでの我が国の地域研究においては、学際的 (インター・デシプリン) 手法が使われ、既存の多くの学術領域が動員されたが、結局はそれぞれの学術領域の単なるケース・スタディーに終わっている。つまり、これまでの学問を検証するための学問に終わり、地域全体の包括的把握のための学問には至っていない。地域研究は、今日の時代が要請している包括的研究に応えるのは困難な状況にあるといっても過言ではない。

このような状況を突破して、時代の要請に応えられるのは、我々が求めている地域学であろうと考える。この地域学では、学際的手法を避けて知識統合的 (マルチ・デシプリン) 手法をもって、地域全体を包括的、「俯瞰的」に考察しようとしている。

平成12年4月 富山国際大学に開設された地域学部は、このような時代の要請に応えるべく設置されたものである。地域学についての詳細は、後掲の拙論「地域学とそのカリキュラム化」を参照いただくことにするが、この地域学という学問にはいまだに定説というものがなく、また日本で初めての学部でもあって、その前途は決して楽観を許さない。

しかし、地域が主体性を主張する時代に対応できる人材、また専門文化主義を乗り越えて新たな学問の地平を切り開こうとする人材の育成は急務であって、試行錯誤を繰り返しながらも、地域全体の包括的研究に向かって挑戦して行きたいと考えている。そして、その挑戦の場、研鑽の場に、今回創刊されるこの地域学部紀要がなることを願って止まない。地域学部ともども本紀要へのご支援、ご指導のほどお願い申し上げて、発刊の挨拶としたい。

最後に本紀要発刊にあたり、ご多忙の中、わざわざ論文をご寄稿下さった本学学長石坂誠一先生に心からお礼申し上げます。

(注1) (注2) 吉川 弘之: “日本学術会議第17期活動計画作成に際しての会長所感” 「学術の動向」, 1997年、12月号、14 - 22ページ。

(注3) 1 国立民族博物館地域研究企画交流センター: 「地域研究論集 特集; 地域研究の海へ」 JACAS Review, Vol.1 No. 1, 1997年8月、平凡社。

2 日本学術振興会: 「学術月報 特集: 地域研究」 Vol.50, No.12、通巻637号、1997年12月号、日本学術振興会

3 桜井 由躬雄: “地域学とアジア” 「学士会; 講演特集号」, 1997年11月号、170 - 183ページ、学士会。